

第三の巻 闘争主体へ

第22話 九州住民斗争奄美合宿

77年5月

私たち無我利者のことを、何人の島人が、どの程度に理解しているかは、未だに仄かなる？ですが、橋口富秀、山下春英、新元博文のような「島一番、村一番」の無我利者はとてもかく、ほとんどの島人の私たちに対する信頼は、理解ではなくフィーリングによるものなのです。例えば島人はこんな風に言います。「今度来た若いのは良い、あれは顔が開いておる」。「顔が開く、この意味するところが理解しえないならば、その人は未だ自己変革が為していない証拠です。」「顔が開く、とは、心がエゴ、自分に対する想い、から解放されていること、即ち「無我利、ということ。」「権威主義者は顔が開きません、ジイサン、バアサンが直感的に看破るところです。革命はこのように「辺境最深部、で、戦士たる者の本物とニセモノを評定し、選択しているのです。」

さて、九州住民運動を連帯させる努力は、水俣の園さんや、土呂久の菊村さんを中心に4年目を迎え、博文の丈風呂敷に乗せて、ゴールデンウィークの奄美交流合宿にまで漕ぎつけました。私にとってこれは実にタイムリーな集りでした。ヒッピームーヴメントの解体は、必然的に新しい関係性の模索であり、未知なる者との出会いを通してしか、自己変革はありえないのです。

九州各地から集った30名近い人々は「顔の開いた菩薩様」であり、「一向一心」であり、これから「辛酸入佳境」を共にして行く同志となりました。「祖霊の郷土、水俣から」の砂田明さんとも、会うべくして出会い、前田俊彦さんとは、スワノセ以来8年ぶりに再



会しました。コミュニオン運動に懐疑し、深く低迷していた頃の私しか御存知ない前田さんには、大変な驚きだったでしょうが、私の方も、スワノセのような秘境を訪ねて来て「この世の成り立ち、のような事を探っていた謎の俳句ジイが「オレはますます自分の墓場は三里塚だ」て気になったなア」などと言うのを聞くと「やっぱり世の中、よっぽど切迫して来たのだな」と痛感します。「明日は労農合宿所のオープニングだ」と、「奄港宣言の会々長が、奄美を脱った翌日、岩山大鉄塔が奇襲され、東山薫の虐殺へとエスカレートして行ったのですから、前田さんもますます腹が決まって行ったことでしょう。」

地域住民斗争をいかにして、党利党略やセクト主義の分断、歪曲から防衛して、住民主体の戦いに組織して行くか、むづかしい問題ですが最大の課題となるでしょう。

第23話 水俣、三里塚へ

1977年6〜7月

6月にミオ子供達と、約一ヶ月半の旅をしました。水俣、三里塚と連帯すること、折から8月6日の広島集会に向けて平和行進を続けている仲間たちに会うこと、及び個人詩集「奥里物語」を東京で自主発行するのが、主な目的でした。

水俣、三里塚は、私にとって「鬼門」の如き存在でした。それらを「避けること」によって、ヒッピームーヴメントは「もう一つの革命、即ち「愛による革命」というヴィジョンに夢中になったのです。「第四世界」という仮称で想像される国境無きアフリミティーヴ世界、今や破滅に追い込まれている美しい野性的世界に「片思い」することによって、目の前の現実から逃げて来たのです。アメリカインディアンは私たちにとって、原始社会の自由、平等、友愛の理想でした。しかし歴史は否応なく、カナダインディアンの水俣病や、ウンデットニーの反乱などの現実を見せてくれます。インディアンを絶対化し、自己同一視することによって、敵を抽象化するという観念操作は、水俣や三里塚のリアリテイの前で、反古になってしまうのです。観念的平和論者たちに「反権力の怒り」を実感させ、「人民の怨念」を魂の中へ吹き込むが故に、水俣や三里塚は人民の「聖地」なのです。「多くの人々の祈りが捧げられた場所は、霊的なエネルギーに満ちている」と、聖者は言います。聖地ベナレスやブッタガヤで、全身で感じたあの戦慄と解放感を、私は水俣や三里塚の大地を踏みしめながら感じました。薄いヴァイブレーションなのです。

個人的な怨念が、全人民、全生類の「怨」によって止揚され、虚心、無心となって、宇宙大の「怨」を行動原理として戦う時、セクトを超えて、人民は真に団結しうるでしょう。小宇宙の「怨」を直視し、コンプレックスから自己を解放しない限り、存在の底を流れる、生きとし生けるもの、声を聞くことは出来ません。セクト主義者とは、結局自分のおしゃべりがうるさくて、声なき声に耳を傾けられない連中なのではないでしょうか。

水俣のあらい導さん、三里塚の吉橋の翁さん、私が深い畏敬を感じたこの文盲の菩薩たちこそは、虚心にして存在そのものが「怨」になり切っておられました。世界をその最深处で支えているのは、実にこのような無名の存在ではないでしょうか。生命の偉大な流れは、水俣の汚濁地獄の中で、真実清らかだった人々によって通せんぼされ、のぼせ上った人類の上に逆流して行くでしょう。そして権力は、三里塚十年余の斗争の中で、自己放棄してしまった人民たちから、どのような弾圧によっても支配しえないものがあることを、悟らされるでしょう。三里塚を後にして、私は単身、政谷中村を訪れ、70回忌を弔うと共に、血と火の復讐を誓って参りました。

水俣、三里塚、あるいは沖縄などの革命最前線には、既に敵身的個人によるナロードニギが試みられています。彼らを通して私はその地域の「生ける道祖神」の如き存在に出会いました。無我利道場が奄美斗争への「橋渡し」的存在であるように、ナロードニギは巨大な人民戦線のネットワークの、網のつなぎ目のような存在になって行くでしょう。

第24話 広島、長崎、平和集会

1977年8月

被爆33回忌に向けての平和行進は、全てがミステリイに包まれていました。例年、原水協(日共系)によるリレー行進によって行われて来た平和行進ですが、この年は日本山妙法寺系の若者たち十数名が、5月中旬に東京から歩き始め、日一日と行進が膨らむにつれて、行進者自身が何が何だか分らない混沌に巻き込まれて行ったのです。

ところで、日本山妙法寺というのが、奇々怪々たる宗団で、ヒッピー仲間の多くがこれに帰依し、何人かは出家までしているわけで、私もインド旅行の頃から、何かと関つて来ました。確かに、開祖藤井日蓮師の法華経の荒法師としての迫力は、九十何々に下られても、昔日をしのばすに十分であり、戦前は太鼓一つで満州を布教し、右翼に情報を送り、戦後は法華経の権威を絶対化するためインドの仏教聖地に偶像崇拜の極めつけとも言うべき仏舎利舎(中に仏さんの骨が鼻クソ程入っているのですが)を建立、現在は仏教国スリランカの支配勢力と結びついて、少数ヒンズー教民族の弾圧に加担しておられます。

海外へ向けてのこの国粹主義が、どうしたことから国内組織作りは、日本共産党系の佐藤行通上人という怪人物に一任され、御存知のように、三里塚4000メートル滑走路での裏切りを生んでおります。右翼と左翼を外と内に使いこなす、南無ミヨーホーレンゲ狂の百地三太夫というところでしょうか？

世間知らずの若者たちが、太鼓を叩いて平和行進をしているのを放っておく手はない、というわけで、原水協国際部長でもある佐藤上人は画策し、地区の原水協に指令を送り、若者たちの行進にリレー参加させ、被爆者救助の名目で沿道カンパをしたのですが、その金がどうなったのかは、ダシに使われた行進者の誰も知りません。広島に近づくにつれて、実行委(実は原水協)に操られている日本山系と、フリー参加の分裂は次第に決定的になって行き、似島キャンプ場に集結した時は、200名以上の若者たちの間に、モヤモヤが立ちこめていました。「何が何だかさっぱり分らん、是非来てくれ」という仲間たちからの電話を受け、飛行機に乗るなどという「悪い業」を作って、私は広島へ飛びました。

六月に上京した際、私は京都集会に駆け参じて、行進者に向かって「ドンドンドンと、オマエたちは何処に向って歩いているのだ？」という詩を述べたのですが、結局、広島で私に出来たことは、8月6日平和公園での偽善者集会に、実行委(陰に藤井日蓮師)の命令通り参加して、似島キャンプインの仲間たちを裏切った約70名の日本山系の仲間たちを糾弾することだけでした。無念残念なことでしたが、結果的には日本山に帰依した若者たちとは、これで縁が切れてしまいました。南無妙法蓮華経！

広島から長崎の反戦集会に参加した私は、似島平和キャンプインが、約百人のヒモのつかない若者によって行われたことを報告、「やったやった、数は問題ではない」と前田さんや戸村さん、川本さんなどの、ヒモのつかない先輩たちの祝福を受けました。この2つの集会参加によって、無我利は新しい関係性のルートを、飛躍的に広げたのです。

第25話 アブリ漁

1977年8~12月

反打運動の翌年に、十何年ぶりで復活した平田部落の伝統、アブリ漁。は、若者奪回と地場産業復興に賭けた、山下春英、まつの天婦の全てを賭けた戦いでした。漁期は8月から12月まで、無我利道場も入植早々から参加しました。

アブリとは、集める意味です。漁法は、四つの伝馬船から海底40mに沈められた四つ張り網の中へ、ムロアジの群を誘導して来た灯船が入り、号令と共にいっせいに引き上げるといふ、極めて原始的な漁法ですが、春英はこれに、水中電灯、漁探、ウィンチなどの近代装備をしました。焼内湾が東支那海と接するあたりで、夜を徹して行いますが、実労5分間。網を曳き上げる時のクソカの「恐怖の5分間。以外は、サシミを食ったり、底釣りを楽んだり、星を見たり眠ったり、5~6人が乗った伝馬船を一つのファミリーとして、四つの家族が「もやい綱」で結ばれて、原初の厩に漂うのです。

私は1号網伝馬船のスタッフとして定着。ダマリが2号、3号は未定で、死が無くて5号にウルフが定まり、無我利から連夜5名をだいたひ確保して来ました。山また山の雪国で、ハタケまで海らしい海も見ただことのない私が、奄美の海で漁師の真似事をするようになったのでから、運命の不可思議としか言いようがありません。夏のベタ風ぎの海からミーニシ(新しい北風)の吹く秋へ、そして冬の「かわし」の季節。肉体の疲れと、海のスリルが深まり、一瞬のうちに南西から北西へ風が「かわし、時化る中を、命からがら湾内へ逃げ込む時など、ベテラン達の怒鳴り声の中に、フッと死と隣り合わせの生の厳粛な静けさを感じる時があります。海や陸の危険に魅せられるたびに、私の血の中にも、海洋民族の野性が肌打っていることを感じます。引き寄せerのです、死神を、身近に引き寄せて、彼の正体を暴くこと、観ること、恐怖に打勝つにはそれしかありません。



空アブリ、の続くことがあります。海上ホテルというわけです。大漁旗をひるがえし意気陽々と平田に帰り着き、三々五々に車や船で、各部落へ直売に廻ることもあります。

この二十数人で行う生産活動を通して、私たちは平田人とのつき合いを深め、それは久志と平田の絆を更に強くして行きました。あるいは又、賛成派部落へも大手を振って魚を売りに行き、おかしさん達とジカに話し合える機会も得られます。

前年まで実験段階だったアブリ漁が、この年からやっとメドがつき、奄美の海を守る漁民の戦いを、確固たるものにしました。無我利道場の生計は大半をアブリ漁で賄えるようになり、私の出稼ぎもほとんど必要なくなりました。

来たれ若人!! 戦う野郎共の アブリ漁



「二十世紀を賭けて、海の幸
を楽しみ、共に働く者共の
怒りと哀しみ、斗争と死で
こつて味つけたこの平
和の、甘みと辛みよ」
アブリ組合宣伝部

オ26話 漁業権問題

'78年1~2月

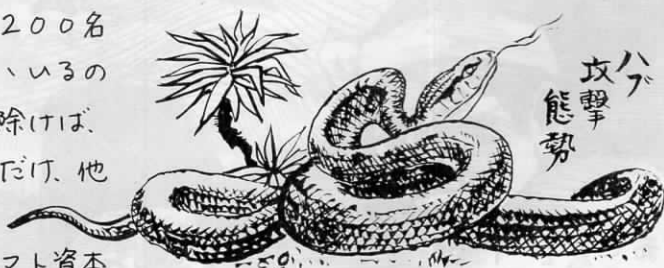
アブリ漁が、翌年への希望をつないで休漁期に入り、春英が「オハ竜昇丸」を自ら設計、製作にかかった冬の季節、宇検村漁協組合はそのでたらめさを暴露し、枝手久斗争は漁業権をめぐる戦いへと、焦臭が絞られて来ました。

年末の砂利採取問題に端を発したいごごは、斗争勃発以来、凍結にされて来た漁協組合員資格審査を、'78年度こそどうしても行わざるをえない状態にまで進展しました。それまで正組合員は賛成派約60人に対して、反対派約30人で、「漁場権放棄」のギリギリ $\frac{1}{3}$ を確保していました。

資格審査会は各部落の代表1名、計14名によって行われましたが、これが全くの策謀で、久志代表は隣部落に住む日和見者が選定されたため、久志反対派漁民は徹底的に落とされました。久志一番の一本釣り漁師、中谷敬助オジが正から準に落され、橋口さんと私たち無銭利の4名は、「資格なし」というわけです。特に私たちの場合、アブリ漁参加によって、正組合員資格たる年間90日以上操業をやっていることは、村内衆知の事実だけに「精神的浮浪者」という理由で、ヨソ者を差別した審査会に対して、激しい非難がなされました。結果は、賛成派80人反対派40人という、これ又ギリギリの一線を保ちましたが、これは翌年度へ向けてへの布石とも考えられます。既成事実を作るために、焼内湾には十ヶ所もの定置網が張りめぐらされ、保償金目当ての「にわか漁民」が出現しました。何処かで「根回し」も進行していることでしょう。

私たちに対する不当な差別に対して、村民会議は再審査を要求すると共に、人権擁護委員会などに訴えたのですが、勿論ラチは明かず、枝手久斗争は始めて裁判斗争へ突入することになりました。脱ヤマトンチュウが、被差別少数民族奄美をバックにつけて、「ヤマトの法」の下で、差別と戦うというや、こしくも革命的状況が発生したわけです。

ところで宇検村漁協の正準組合員200名を越え中で、漁によって生計を立てているのは、アブリ漁と芦検の真珠養殖業を除けば、一本釣りなどのほんの一握りの漁民だけ、他は保償金目当てのニセ漁民です。



おまけに宇検村漁協組合長は、ヤマト資本によって真珠養殖業をやっているヤマトンチュウであり、漁協の株の大半を持っているのですから、漁場権放棄が成立すれば、保償金の大半はヤマトへ持って行かれてしまうのです。奄美の海を売っても、島には金が落ちないように仕組まれているのですから、搾取の構造たるや完璧です。ついでに言えば、隣の瀬戸内町に大規模近代漁法を持ち込んで、ムロアジを乱獲しているアブリ漁の天敵、暴力団をバックにつけた賛成派漁業者も又、ヤマトンチュウなのです。何となく身震いする想いです。

無我利道場創設以来、何とかミニコミを発行したいものと、いろいろ試みたのですが、機が熟さず、77年中に発行予定だった私の個人詩集も、延期を重ねるうちに私自身が作品に興味を失ってしまい、入植以来約60篇の詩も流産させてしまいました。コミュニケーションでありながら、個人として作品を発表すること自体に問題があったのです。

創刊号を「総括特集」とすることによって、私たちの今までの生き方を流いざらしてみましたが、発行1,000部の反響は、私たちの予想を遙かに上回るものでした。

ミニコミこそは、体制の巧妙なまやかしに対する、最も強力な反体制側の武器です。それは単に、マスコミに対抗する小規模なメディアというだけでなく、コミュニケーションとは何か？という根源的な問いに迫りつゝ、アンダーグラウンドにもう一つの文化を形成しつつあるのです。情報の中央集権に対する分権独立運動とも言えるでしょう。ミニコミ文化から出発したカタログ文化が「反動」に転じて行く因縁です。

ところで私も、77年に一万部を発行した「コミュニケーション運動宣言誌」部族以来、ヤマハボイコットの機関誌で終った「オーム」12号まで、十年間もミニコミ作りに関わってきましたが、それら一連のミニコミを通して、自分たちの運動を総括するならば、やはり、その執筆、編集が、私を名を2、3人によって常に限定されて来たことであり、東洋思想とプリミティブをベースにした指導原理や権威めいた言葉が充満していた初期の頃から、反体制運動の理論、フィーリングを「煽動」した後期まで、それらは「リーダーたち」から、一方的に流れる知識でしかありませんでした。多くのミニコミが、情報と斗争理論の背後に、主体者を匿名化してしまうように、私たちのミニコミも、個性の発揚や自己表現の自由を軽視した、普遍主義、全体主義的傾向が強く、コミュニケーション主義の不徹底と行きづまりを暴露しています。

眞里人、は、共に生活する者が、好き勝手に自己を語り、しかも総合雑誌の散漫を避けて、全体の意志を貫くために、編集は全員で討論をくり返して決めて行きました。共感の多くは「関係性の探求」という、新しい革命のテーゼにあったようです。勿論この問題提起は、提起者自身であるコミュニケーション無我利をも無傷ではおきませんでした。実力主義や権威主義が批判されましたが、特に長年の男中心社会の中で潜在的に体質化してしまっている男たちの女性差別が徹底的に批判され、この頃から洗濯、炊事、育児などが、交代制で行われるようになりました。この時期はムガリにとって、第2のピンチとも言うべき変革期でした。その結果、子供3人と大人4人、ダマリ、ウルフ、ボン子、ミオ、ボンという、道場維持ギリギリのメンバーとなりました。住民登録をして、兵庫県裁判の原告の一人にまでなっていたチエと、タエのカツフルが、無我利道場を出たことに関して、もし興味のある方は、眞里人創刊号にチエ自らの手で描かれたカリカチュアを御覧下さい。

「総括を書く」ということは、自らそこを超えているはずなのですが……？

第28話 モズク網撤去

1978年4～5月

外敵を防ぎ、権力を打倒するためには、自立、自給、自治、自決の地域作りをして行かぬなりません。斗争と生活をひとつにした「生産共同体作り、こそは、「持久戦を耐え抜いてパニックを待つ」基本的な戦術体制作りです。

橋口さんと無我利が中心になり、反対派のジイサンたちの参加を得て、〃久志モズク養殖生産組合、が結成されました。アブリ漁の休み期間中、冬から初夏へかけての仕事なので、私たちにはこれが成巧すれば、一年の漁業サイクルが完成するわけです。県立水産試験場の指導を得て、枝手久島の沖合い200メートルあたりに、20枚の網を張りました。

ところが、収穫2ヶ月前の3月末になって、宇検村漁協から横槍が入り「特別区画漁業権、を取っていないから撤去せよ」と通告して来たのです。「今更何言ってやがる！」と資格審査でやられているだけに、私たちは頭にきました。もともと漁協は、私たちの申請を理事会で認可し、網などの資材の幹施までしておきながら、試験操業に対して、このような強権を行使して来たのです。海上保安庁からの再三の勧告があり、やむなく網を撤去しましたが、約¹/₃の網には10～20センチのモズクが、びっしり生えそろう、焼内湾に於ける新しい水産物の可能性を示していました。

〃特別区画漁業権、なるもの、存在を知らなかった私たちのうかつさも反省しなければなりませんが、この権利は漁協が県に要請してくれ限り取得出来ないのですから、今のところ私たちの設備投資と労力の報れる可能性は全くありません。

つい一昔前まで、焼内湾にはモズクなど養殖する必要がない程、豊富にあったと聞きますが、湾奥3つのチップ工場、道路工事、生活廃水などによって、確実にこの美しい海も



汚染されているのです。獲る漁業から育てる漁業に、と、水産物そのものを見直すべき時なのに、保償金目当ての定置網漁が氾濫する一方で、県立水産試験場は「やるだけのことはやった」と言って、この春をもって南部久島から姿を消しました。

隣接する大和村では、本年度ついに一粒の米をも産出することを禁じました。自民党政策によるこうした農、漁業の切り捨て政策は奄美を「金が無いと食えない島」にしてしまうのです。その上、大島紬と林業という二大基幹産業はこれ又韓国や東南アジアからの輸入によって、圧迫され、不振に喘ぎ、奄美の経済的自立はますます窮地に立たされている現状です。そのような時に「奄美振興開発法、による特別援助金の延長を、挙党一致で国に要請していますが、「本土並み」の南発志向が、本土並みの公害誘致を招くのは、火を見るよりも明らかです。本土の50何%、鹿児島県の70何%という低い生活水準に加えて、例えばガソリン代は1立120円というような離島物価、このような経済の谷間に喘ぐ奄美に「だから、ホラ、CTSがありますよ……」と、ヤマト権力はさ、やくのです。

才29話 名瀬へのゆきかけ

1978年

初めて名瀬を訪れたのは、1965年夏、私はこの港町の南国情緒にすっかり心酔してしまいました。飛騨高山という伝統的秩序と「奥ゆかし」文化、の中で育った私には、酔いどれ、チンピラのたむろする名瀬は、開放感と人なつこさと活気に満ちた異次元世界のようでした。なにしろ、今や琉球弧最大の観光地になった与論島さへ、その一夏に訪れたヨソ者は、教人の学生と私にちる名という時代です。思えばこの頃が、奄美群島にとって「樂園」の幕切れだったのです。その翌々年、奄美から北に連なるトカラ列島の最後の「樂園」スワノセへ入植した私は、どうしたこともついで名瀬へ寄る機会もなく、「琉球弧キマラバン」で十一年ぶりに訪れた私は、名瀬のあまりの変貌に呆然となりました。

1953年(昭和28年)12月、「本土」に復帰した奄美を襲った人間収奪に次いで、高度経済成長に見放された奄美村落世界は、この頃より過疎化の才二波を受け、村落から名瀬への人口集中が行われて行ったのです。現在人口5万、なおも過密、拡大を続けているこの地方小都會が、「ファッションは鹿児島を飛び越えて東京から直行する」と言われるほど、自らの島文化に自信と誇りを失ってしまったのは何故でしょうか？

枝チ久斗争勃発と同時に結成された「公営から奄美の自然を守る郡民会議」(議長松原若安、事務局名瀬市)も、次第に尻すぼみになり、若いエネルギーの導入を喝望していますが、名瀬の若者たちの中には何の動きも見えませんでした。「名瀬の若者たちと如何にして連帯するか？」それは無我利にとって最も大きな課題であり、夢でした。そんなある日、折から帰省中のヤスハルとの出会いによって、名瀬に新しい渦が生まれました。それまでジヤズ喫茶であった「乃亜」を、ロック専売店に切換え、その二階に情報センターを設け、若者たちの解放区を作ろうという動きに、無我利も積極的に肩入れしました。鹿児島支庁という代官所と対角線上に在る、この反体制の若作りは、フリースクール、コンサート活動、洗剤追放運動など、四苦八苦の半年を経て7月、ヤスハルの事故をもって、あえなく挫折、解体してしまいました。

「石を投げれば必ず、親戚か知人に当たる」と言われる小都市で、馴れ合い関係を革命して、新しいコミュニティ意識を育て、行くことは大変なことですが、奄美文化そのものが共同体なくして存在しえないのですから、新しい文化を創造するためには、新しい共同体、新しい人間関係を作っていくしかないことに、名瀬の若者たちが目覚め初めたことは大きな希望です。無我利を出て、「乃亜」の助っ人に入ったタエとチエの存在は、島人と大和人の壁を、かえって厚くしたくらいはありますが、名瀬と平田、村落と都市の若者のパイプライン「無我利」の確固性を確固としない限り、奄美の戦いを今後進展させて行くことは出来ません。「島人である以前に、オレは宇宙人である」という若者たちと、一方には奄美ナショナリズム、心情主義と屁理屈と、名瀬の若者たちの世界に、才二、才三の渦が生まれつつあるようです。

第30話 第6回 枝手久祭

1978年8月

「琉球処分百年」という視座を、博文がかつぎ出し「奄美復帰25周年」と並べたこと
によって、第6回枝手久祭は俄然、沖縄への連帯という課題に挑戦することになりました。
三百数十年昔に始った薩摩支配以来、沖縄人民と奄美人民の、何という長い不幸な断絶
だったことでしょう。2月に博文が、6月に私が、それぞれ久しぶりに沖縄を訪れ、金武
湾斗争を始め、多くの人々に連動を呼びかけました。

沖縄からの連帯メッセンジャーとして、旧知の「喜納昌吉とチャンプルーズ」に話を決
め、現地平田と名瀬での「琉球弧交歓コンサート」の準備を進めました。こんな時こそと
期待していた「乃亜」も、ヤスハルの入院なども重なって未だ実力不足で、結局博文と私
が、行ったり来たりテンテコ舞い、その上、祭り寸前になって、昌吉とプロモーターとの
ゴタゴタがあって、やむを得ず「我が子可愛さに手を離す」ことになり、急遽、三里塚の
映画を手配したり、前売券を回収したり、やっと当日を迎えましたが、コンサート代りの
講演会場に集ったのは、大半が九州、東京方面からやって来た「活動家」たち。肝心の名
瀬の若者たちは、商業主義の「奄美まつり」の花火大会に吸収されてしまいました。

翌8月5日、前夜祭。平田青年団特設の海上ステージで、歌と踊りのファンタジイと、
広場での熱気ムンムンたる八月踊り。川内原登と斗う東郷、橋爪両氏が特設した風車発電
の灯までが参加した。この夜の興奮の中へ、歌劇派劇団「無我利座」が、パロディ「浦島
太郎」を引っさげてデビューしました。私としては、ヤマハボーイコット時代の「ヤマタノ
オロチ」に次ぐ、2本目の劇作ですが、「ジイサン、バアサンにも良く分って、うんとラデ
ィカルな田舎芝居を」と思い、出来れば島言葉^{グナ}もとり入れたかったのですが、稽古不足の
わりには大好評でした。ハリボテの石油タンクの燃えの悪かったのが残念でした。

翌日、枝手久祭は船漕ぎ競争の後、シンポジウムを開きました。反対派村民の団結を固
める意図で創られた枝手久祭も、次々に住民斗争の連帯交流会の性格を持つようになり、
無我利の客人30名を含め数十人のヤマトンキユウが参加していました。金武湾斗争の平
良良昭沖縄大使は、昌吉の件を批判、謝罪すると共に、熱々たるウチナ魂を伝えてくれて
「最もラディカルな沖縄」との橋を渡しました。

印象的だったのは橋口さんが、ヤマト都会派の若者たちに「もっと無我利道場へ来て住
みついてほしい、私たちは心から歓迎します」と述べた後、島人に対して「久志だけでな
くどの部落も、もっとオープンに若者を受容れ、シマの若返りに努めて欲しい」と語った
ことでした。ところで、参加した数十人の若者のうち、無我利の客人はほぼ半数だったの
ですが、久志の老人たちには何回説明しても、全員がヒッピーだと信じて疑わないのです。

言われて見れば、私自身にさへ識別出来ない程、この2年間に、反権力政治派と反体制
文化派、硬派と軟派の若者たちの世界には、風俗から語り口まで、確実な相互浸透があっ
たことを再確認して私は深く感動しました。

第31話 維摩の誕生

1978年9月

仏滅後、ブツダの教えが、次第にインテリエリートのものになって行く中で、人民の側からイチヤモンをつけ、ムガリ、仏教を人民のものとして奪回するのが、ヴィマラキールティ、維摩居士という世俗界の大長毛を主人公にした戯曲「維摩経」です。仏陀の一番弟子という自惚れとエリート意識ブンブンたる舍利子を、維摩ジイサンはトリックにかけて、女にしてしまうことによって、彼の内なる女性蔑視を、こてんぱんにやつ、けるくだりもあります。「汚れているのは、女性ではなくて、汝の眼だ」というわけです。

さて昨夏、ポン子が「ひかり」を出産したのに続いて、9月7日、ミオが又しても女の子を産みました。今回もミオは自宅出産で、宇摩の時には性別を確かめる余裕すら無かった私も、今回は「何だ、又しても女か!」と叫んだ程、落ち着いたものでした。一瞬がっかりしましたが、「女の子ばかり4人も授けるとは、よほど深い意味があるに違いない」と神様の腹を探りました。危機の時代には、女が大量生産されるとも聞きました。そこで、生まれの子に維摩^{つゝま}と命名しました。ヴィマラキールティ居士が、今回は女の子になって、私たちを革命にまで下さったというわけです。このイメージの飛躍、ここに宗教革命があるのでありますまいか。坊さんにはやれないのが、宗教革命、信仰復活です。

女の時代が来るでしょう。男の支配が長すぎました。私たちは、来るべき女の革命のための「橋渡し、助っ人、礎石、あるいは「イケニエ」といったところでしょうか。これ以上公害を出さなくとも、現在地上に存在する放射性物質だけで、究極的には汚染によって滅亡する地球ですが、それを少しでも長引かせ、「意識」という進化の先端を、どれだけでも「完成」へ近づけるためには、一刻も早く、世界をその根源から革命しなければなりません。男にはそれが不可能なことが、二十年ばかりの経験で思い知らされました。

こんな絶望的状況に世界を追入んでおいて、今更、女性に期待するとは、男の身勝手というもののですが、勿論、謝罪のつもりで残る生涯を、女の戦いへの支援に捧げたいと思っています。即ち、私たちは、家父長制社会の裏切り者として、今までの男ではない男に変身して、母系制社会の礎として「男のプライド」を放棄するつもりです。コミュニケーションは、女と男の平等を実証して行く場です。女が実力を持つのは、女同志が団結することであり、事実ミオとポン子を中心とした女たちの団結によって、無我利はどんどん変身しつつあるのです。維摩が生まれた直後、志布志での九州住民斗争合宿には、ポン子が無我利を代表して参加し、「ヨソの女、たちと、何やら運動して来たようです。一戈になったばかりのひかりを、十日近くも、安心して放つたらかして。このようにして女性が、自らの主張を貫き、自由を獲得して行くことからしか、世界を変えることは出来ません。個人としてのウーマンリヴから、コミュニケーションとしてのリヴ運動へ、疎外され、差別された性を、復権することは、今後の課題、ヴィジョンでしょう。奥里に再生された維摩様が、どのように女の革命を説かれるか、興味のある方はお越し下さいませ!

さて、枝手久祭直後に再開されたアブリ澳と並行して、各部落豊年祭、運動会などが、反封建運動に景気と節目をつけるべく例年通り行われ、肉体の疲れと精神の活気の秋深まる中で、枝手久斗争は新になる局面を迎えました。即ち「環境容量調査」の歯止めになつて隣の瀬戸内町澳協の一角が崩れたのです。澳協理事会は誘致派の暴力的威しの下に、4村1、欠席2で、調査にOKを出し、更に10月11日、南部4ヶ町村の役人たちが密室会議を行って、県に調査依頼をすることに決めたのです。

枝手久斗争に対する^{から}搦め手として、東燃はこの2、3年、盛んに瀬戸内町を根回しして来ました。伊須湾、伊子茂湾のCTS計画も、三井、三菱という線は伝えられています。根回しの先兵をやっているのは東燃のようです。しかしCTSだけではありません。「原子力船“むつ”を受容れるなら20億円出す」などという、覆面紳士も出沒していると、瀬戸内町に企まれている策謀は、量り知れなく不気味です。

「瀬戸内町のみなさん、最近町内のあちこちに『船は来ない、人口は減る、産業は振われない、一体この町はどうなる?』という看板が立っています。『さあ、企業誘致だ、何もしないでゼニがもらえる、島の未来は企業にまかせよう』というわけです。こんなふざけた無責任な話があるのでしょうか。奄美の日本復帰は、若者を奪われ、放ったらかしにされた25年間でした。私たちはずうっとだまされ、利用され、差別されて来たのです。そして今、過疎弱体化した奄美は、石油と原子力の基地にされようとしているのです。これではまるで、血を抜かれ、ろくな手当ても受けずに、毒を飲まされるようなものです……」

宇検村民会議から、加計呂麻島への教宣活動に行く前日に、事務局長から「パンフ三百枚、文章は任せろ」と連絡があり、大至急私がガリ版りしたのがこの文章です。「私たちは、と書きながら、私はくすぐったさを禁じえませんでした。パンフにはこのあと「日本帝国主义、ファシズム、有事体制、核武装」などというコトバを使って危機を告げました。

加計呂麻島は奄美群島の中でも、特に過疎化した島で、30近い部落の中には廃村になった部落さへあります。差別され、忘れ去られていたこの島へ、原子力船“むつ”、やCTSが来ると言っても、それに抵抗するどれだけの活力が残っているのでしょうか? 森谷事務局長や瀬戸内町民会議の代表たちと、ガタガタ道を走り、マイクを握っているうちに私は次第に「最近、宇検村の賛成派は、東燃がいつまでたっても金をくれないので、内輪もめが続出し、つい先日湯湾の賛成派の青年が、白昼、東燃の社員をなぐって、前歯を叩き折るという事件が起こっています」などという、えらく卑近な例を上げて、訴えるようになっていました。パンフの結びは次の通りです。「枝手久斗争六年の体験によって、私たちは連帯こそが力であり『団結こそが武器である』ことを学びました。私たちは断固として、ヤマト植民地政策と戦い、自らの血と汗によって奄美世を復活させねばなりません。それだけが苦しめられ、涙を吞んで死んで行った祖先の霊に対する、唯一最高の供養です」

第33話 裁判斗争と直接行動

1978年11月

宇検村漁協を相手として、私たち久志漁民5名を原告に立てた「漁業権裁判」は、村内反対派からの資金カンパだけで既に百万円近く集まり、村民会議は鹿児島合同法律事務所へ弁護人を依頼、いよいよ枝子久斗争も法を盾に戦うことになりました。

もともと法律なんてものは、国家の治安維持のために定めらるものなのですから、反権力側が法律を盾に取っても、それで正義の勝利を獲得することなど出来ません。

とは言え、裁判制度や刑罰制度が存在し、それによって苦しめられている人民がいるのですから、裁判斗争を通して支配者側のからくりを暴き、良く分っていない人々、無関心の人々の目を開かせ、味方につけて行くことは大切なことです。勿論、先方が一番恐れているのもこの一歩であり、さればこそ私たちは「オレの人権を認めないのかッ！」と、法治国家のタテマエを突き、タテマエを粉砕し、裁判長殿をして「法律とは、実は、人民の権利を剝奪する理由を、正当化するための支配者側の盾である」というホンネを吐かせ、人民の名のもとに国家司法機関を処刑せねばなりません。

さて、漁業権裁判は、被告側が引き延ばしにかかり、10月25日、やっとオー一回冒頭陳述が開かれましたが、12月21日に予定されていた証人尋問も、資料不足という理由で無期延期になりました。恐らくは79年度の資格審査会(2月中旬)で原告5名の組合加入を認めることによって、裁判をウヤムヤにしてしまおうという腹でしょうが、私たちの要求のホンネは「人権でなく真実」なのですから、追求を緩めるわけには行きません。

私たちが、権力者側の引き延ばしに頭へ来ているところへ、11月6日、大分新産都二期計画反対の漁民のリーダー、西尾勇さん(36)が、佐賀県漁協組合長を制裁するための日本刀で左腕を斬ったというニュースは、リアルに胸に来るものがありました。「これで村長や賛成派共は、震え上がるだろう」「漁師として当然のことをやったまでだ」「これが実力阻止の手本だ」などなど、奄美の本物の漁師たちは賞讃を惜しみません。「草の根通信」からの支援要望を、アプリ漁仲間へ伝えたところ、西尾さんの直接行動を支持し、支援することを約束し、「祝久漁 西尾勇様」の寄せ書きまでしてくれました。

裁判斗争がダラダラと引き延ばされ、漁協のデタラメの末に「漁場権放棄」にまで追いつめられ、南部四ヶ町村長の調査依頼に応じて、県が予算を組み、強権的に環境容量調査に出て来るならば、いよいよ実力阻止以外にないことを、思い知らされつゝある現在、西尾さんの直接行動が、決して一部の特殊過激派だけのものではなく、大地に根づく人民の「明日は我が身」であることを、宣言して行かねばなりません。

裁判斗争はより多くの人民を味方につけるための一戦法であっても、決め手ではありません。直接行動また然りです。私たちの直の勝利は、自ら耕し、自ら漁り、共に食らう者共の、永遠の業の中にこそ在るのです。
「生を求める者はこれを失ひ、生を放棄する者はこれを得る」



オ 34 話 ヤ ス リ ョ オ 安良オジの死

1978年12月

暮も同近になって、安良オジが五右エ門風呂の中で、うつ伏せになって死にました。橋口さんとウルフとタカオの必死の人口呼吸が、湯湾から医者を連れて来るまで、一時間以上も続きましたが、一切の努力はムダでした。79才、最も元気の良かったジイさんだけに、この急死は反対派の老人たちに、強いショックを与えました。

私たちが入植してから、一度も顔を会わせたことのない二人の寝たきり老人が死んでいますが、私の入植希望に立会って、無我利を受容れ、共に戦って来た老人の死はこれが初めてです。助平話の好きな、ヒョウヒョウたるジイさんで、かねがね「村長の奴をブスリとやれば、それで勝ちよ」などと、物騒なことを言っていたものです。

石油基地計画が明るみに出た頃、賛成派のボス連中が、久志反対派老人主たちの「死亡予想リスト」を作って、枝チ久島売却を計画していたことが露見し、老人たちをカンカンに怒らせ「この戦争に勝つまでは、意地でも死なん！」と震い立たせ、橋口さんの献身的な健康指導もあって、活気を甦らせ、久志老人パワーを村民会議に漲らせたのです。

当初は2,3年でケリが着くと思っていた斗争が、明ければ七年目というのに、未だに決着の目途もない現在、老人たちの意気消沈をいかに励まし、盛り上げて行か、私たちの務めだと思っています。※ぞ！」と口癖のように言っていた馬太郎ジイさんの別れの挨拶でした。



※夏には最年長86才の馬太郎オジが、80才のおもとバツケと共に、鹿児島島の長男のところへ去って行きました。

「こんな大戦争の真最中に、シマを去るのは本当に心苦しく、申訳ないのですが、もし何かあればすぐ飛んで来ますので……」と、「鎌三本いつもビカビカに研いでおります

秋には80才のウミ子バツケが、大阪の娘のところへ去りました。庭の野菜作りと、他家を訪れてのよもやま話が唯一の生甲斐であったバアサンには、都会のアパートの冬はどんなにか寂しいことでしょう。

現在、最年長81才のハ郎オジを筆頭に、70以上の老人は男8人、女13人計21人。これが久志反対派勢力の大半なのです。1990年完成予定の徳之島核再処理工場計画に焦臭の絞られた奄美斗争、今後10年間に私たちは、何回も何回も老人の死を悲しまねばならないでしょう。ヤマトへ去った子供たちに代って、私たちは権力に抗しつゝ、死んで行く無名の人民の死を、見とるためにやって来たのですから。

「死はほんの楽味だ」と聖者は言います。成程、人生というたかだか7,80年の旅を、気力で満ちし、生を味わい深いものにしていくのは、他者の死を通して想うオノレの死です。成ろうことなら、死神が私の生を奪うその瞬間まで意識を明晰に保ち、使い古した肉体を、丁寧な感謝をこめて、神にお返ししたいものです。

才35話 アブリ組合解散

’78年12月

閉じられた共同体社会、島宇宙内部で、長年積もりに積もった同族血縁同の感情的な歪みや屈折「近親憎悪」というやつが、テリトリーをめぐる「種内攻撃」という、同族内ライバル意識にからみ、もつれると、シマ社会に隠然たるセクトを形成して行きます。一つの部落が、心を一つにして事に当たれば、必ず上手く行くと承知の上で、なあかつ心を一つに出来ないのは、潜在的な血の呪縛でしょうか？ 久志などは昔から共同事業が上手く行った試しがないとのことです。しかし程度の差はあれ、どのシマも長年閉じられて来たのですから、歪みや腐れはあるのです。世界が病んでいるのですから、部分だけが健康などということはありません。宇検村14部落中、唯一反対派一本でまとまっている平田も又、例外ではないことが、私たちヨソ者の眼にも明らかです。

アブリ組合の忘年会は、山下春英の爆弾宣言によって、薄まじいショックを平田人に与えたようです。「これまで4年間、皆様に手伝って頂きましたが、今の状態でこれ以上アブリを続けることは、真綿で首を締めるようなもので、もはや私の力の限界です。誠に恐れ入りますが、本年をもって一応、アブリ組合を解散させていただきます」

奥里を守るため春英は、借金に次ぐ借金を一人で背負い、装備を整え、船を作り、労力即ち戦力を確保するため、網元4分、子6分という、世間とは逆の配当率にして、自己犠牲に耐え、今一歩というところまで山下水産を漕ぎつけたのですが、宇検村漁協に揚げ場がなく、名瀬の仲買人共に買い叩かれる豊漁貧乏を続けている現状では、冷凍冷蔵庫を持たない限り、借金が嵩むばかり、たった2~3,000万円で、かけがえのない地球が救えるという寸前での挫折です。

組合とは名ばかり、経済的負担は春英一人に背負わせて、獲れても獲れなくても自分たちは無傷の立場で参加して来たのですから、解散宣言は全ての人々の胸に、鋭く突き刺さるようでした。「解散でなく、発展的解消だ」という私の発言は、多くの賛同を得ましたが、それは「解散などという事がヨソに洩れたら平田の恥だ、何とか平田人の力で……」という旧いシマ意識によるものでした。しかし村内で最も活力を持つ平田ですへ、経済力、労力、あらゆる面で、シマンチュウだけでの自立更生、など不可能なことは、衆知の事です。

博文が欠席していたので私から「平田の伝統であるアブリ漁を、平田だけのものにしてあかないで、全国の人民同志のものとして解放し、山下水産アブリ株式会社として、広く同志に株主になってもらってはどうか？」という、先日来られた宇井純氏のヴィジョンを提言してみましたが、その時は2,3人を除いて、もう一つピンと来なかったようです。

「経済的メドさへ立てば、いつでもアブリ漁を復活再開する気は十分にありますので、その節は改めてよろしく願います」と、春英が結んだことによって、平田ナショナリズムは自己変革を迫られたのです。そして数多斗争の命運をかけたアブリ漁が、全国の住民斗争にも前代未聞の「生産共有路線」を打ち出すだろうことを、私は予感するのです。

余談

焼内湾のゲリラ隊長

山下春英

季刊「琉球島の住民運動」

第六号 七八年十月発行

山田塊也

「キサマらが過去において、奄美にやつて来た事の、オトシエをつけてもらおうかッ」奄美郡民を代表する春英の、ドスの効いた唸りに、平田部落公民館がウォーッと唸った。

「ハ、ハイ。ハ、ハイ。」と、薩摩の代官殿は、立つに立てず、坐るに坐れぬ妙な中腰のまゝ、百数十人の島人を前に震え上った。

「こっちがその気になれば、キサマら、この奄美から無事に出られない事くらい、分つてゐるんだらうな」再び公民館が力む。小役人達は完全に血の氣を失っていた。連中の小っぱけな脳裡をかすめるのは、焼内湾に高々と吊され、風雨に晒される己が藍襖の姿でもあったか……

三百数十年の民族の怨念が、不動明王のような怒りの権化と化した一人の男のハラワタを通して噴流し、その純粹な情念は、次第に人間実存の悲しみをも触発するような、普遍的な神聖に達していた。

権力の衣を借りて、コンソシと私利私欲を貪つて来た鹿児島県庁の俗物たちに、このように高貴な魂の底からの叫びなど、理解出来るはずもなかった。陳情を聞いてやるつもりがこんな恐ろしい破目に至った我が身の不運だけが悔まれた。そこには、永年の植民地支配とヤマト同和政策によって「奄美は完全に去勢されているもの」という、大誤算があった。半身低頭、ようやくくじけその場をすらかつて以来、このキン玉を抜かれた代官殿の姿を、奄美で見かける事は又と無い。



人物反射鏡

しかしながら圧倒者共は、この屈辱と復讐を決して忘れなかった。一年後、即ち七八年現在瀬戸内町漁協の一角を崩した権力は、強引に環境容量調査の実施を企む。闘争六年、ここに枝手久島石油基地計画は、「海の上ならこっちのなんだ」と凄む連中の実力阻止闘争へと、幕を切って落すのである。

オヤジ、山下喜村。世界最高の漁民、糸満漁法の流れを汲む海の怪物。かつて素潜り水深五十米。文盲にして老いてつんば。目の前の枝手久島に何が企まれているやも知らず、存せず、だが最近の浜の汚れの只事ならめを悟って、セガレを徹する。

「オイ、春英、海が病んでゐる。何とかしろ」春英、四十一歳。大阪の鉄工場で工場長まで勤めたこの男が「夜毎の夜を海の夢にうなされて、いかんとも抗し難く」退職金代りに鉄板をもらって、故郷の海に鉄船を飾ったのは、枝手久島闘争勃発の半年前、これぞ祖霊なる海の神祕なる意志でなく何だ。

孤りのんびり漁をするのが安穩であった。だがそのような個人主義は、彼に与えられた能力の許すところではない。この世俗の辛酸をたっぷりとなめ尽くし、赤銅色の筋肉と、向う気の強さと、大胆な落ち着きと、どきついユーモアで、常に「中心人物」ならざるをえない男にとって、漁法も又おのずから生産共同体作りであり、闘争組織作りであった。久しく絶えていたアブリ漁（夜炊きアジ網漁）を復活させ

ヤマトに収奪されていた若者たちを奪回し、脱ヤマトンチュウたちを全幅の信頼を以て受け入れ、僅か四年目にして、恐るべき戦団に仕立て上げた。

「勇気」彼が若者に与える最大のものはこれだ。正々堂々たる、男らしい勇気。

「春英兄、この波じゃどうかかな？」

「大丈夫だ、この程度の時化、ワシなら出すぞ」価千金の一言。若者たちをして、荒れ狂う怒濤の中へ、小船を乗り出さすのは、知識でも、技術でもない、男春英のこの一言。

やがて一朝、事の起こりて、「焼内湾騒乱せり」の報に接しなば、想うべし。そこに「竜昇丸」なる怪船の在りて、チンパンジーの真似のうまい、イタチのような尻を放つ、虎のような大音声の持主、奄美の海神様の傑作が、陣頭に在ることを、ゲリラ隊長の曰く。

「オレたちの戦いは芝居なのだ。今迄もそだった。ハッターリなのだ。だがいずれ、ハッターリの通用しない時が来るかも知れない。その時は、殺るしかない。だから、出来ることならそいつを避けたいから、もつと必死になつてハッターリ芝居を盛り上げんならんのだ」これぞ非暴力直接行動の真髓。

もし青春のシラケを嘆く若者の在りて、胸躍る海上ステージへの出演を希わんか、来たるべし。悪相、奇相、怪相、物騒、多種多様な妖を束ねし、彼の船軍に加わりて、無名なる汝が神を實現せよ。

唱える呪文は……

「とうとがなし 枝手久大明神ッ」

第36話 新春決起集会

1979年1月

「南無枝手久大明神」と、真赤な布に墨黒々とした、めた懺^{のぼり}を、部落の真ん中にへんぽんと翻えして、年が明けました。昨午暮「お歳暮には懺を作って、反対派地主に配ろう」というアイデアもあったのですが「その手の事をやって、賛成派のチンピラ共を批発すると、道路際の先人宅などがヒドイいたづらをされる」という前列を、橋口さんから固めたので、残念ながらこのアイデアはお流れ、又は保留という事になりました。

6日早朝、橋口さんから電話で「突然やけど今から阿室で、村民会議の決起集会をやるから、ジイサンたちをアブッて来てくれ」とのこと。二日酔いの頭をかいて部落回り。

最初に行った家で、区長の清助オジにはったり、決起集会のことを告げると「急に言われたって段取りがつくもんか、ワシは今から役場に用があるんじゃ」結局、4人のジイサンと無我利が子供を含む10名、それに橋口さんとで阿室へ。10日の予定を一体何事があって突然くり上げたのかと聞くと、「今朝方、阿室のボス連中が、村役場の出初め式に行ったのを目撃したから、この機会に阿室支部にはっきりしてもらうためだ」とのこと。

ボス体制にガツガツ固められた阿室共同体は、枝手久島の $\frac{1}{3}$ を観光企業に売却したボス連中が、最近石油企業にも誘致賛成に転向したため、全員が「物言えは唇寒し」という状態になっています。「役場主催の行事には一切参加しない」という村民会議の誓いを追求されて、阿室支部代表の答える要領を得ない説明と、納得の行かない4部落の反対派、枝手久斗争もいよいよ三里塚の名言「贅肉がとれて筋肉がしまる」状態に成って行くだろうことを予感しました。人民軍の実力とは、経済力でも、人の数でも、武力でもなく信愛と団結の力です。裏切り、日和見、二重スパイなどは、早目にチェックしてはっきりさせることです。村民会議から多少の脱落者が出て、とにかくこちらの情報は筒抜けなのに、向うの情報は全く入って来ないという現状は、いざ決戦を控えて大改造せねばなりません。敵は賛成派でなくて、東燃であり、国家権力なのだということを、村民会議自身がもっと明確に自覚すべきです。

さて今年の無我利道場は、更に発展、飛躍、充実が約束されそうです。子供4人、大人5人の定住スタッフに加えて、ギャー、タカオ、エーキが住民登録して本気でやる気ですし、他にも2、3人がほぼ内定。問題は女です、女！



東京では仲間たちが、枝手久斗争の支援運動体として「関東無我利会(仮称)」を結成「関東奄美青年同盟」ともジョイントして、昨午暮の東燃本社攻撃にも参加したとか、いよいよ「奥里物語」も、重層的になって来ました。

隣作か、駁作か？ 真実か、デタメか？ 本気か、遊びか？ 正気か、狂気か？ 物語の評価はともあれ、私講釈師として秘かに恐れますことは、東燃にあつさり退散されることでごさいます。では、物語の続きを祈って、次回も又、よろしく御暴負のほどを!!

ボム シャンカール!!!!!!